



貞岡孝章さん(72歳)
香我美町山北
子どもの頃に経験した戦時中の山北地区の日常を後世に伝えようと、2001年3月発行「香南春秋」の執筆者の一人として体験記を残しています。



【勤労奉仕】
戦時中は、男手を戦場に借り出された農家などへ支援をするため、当時の小・中学生は、授業をなげうって奉仕活動を行った。

変わりゆく生活

昭和20年1月、山北国民学校二年生の三学期には、これまで配給制であった食料や生活必需品も、その不足は極限にまで落ち込み、農家でも米の強制的供出で麦飯、芋飯ばかりで、私の家など貧農家は力ボチャを主食にしたこともあった。

学校では、文房具もまともに入らず、音楽室の横にあった購買店も閉店になった。クラスに四足しか配給されない運動靴が、抽選であたっても足に合わない者は、先生か

ら「兵隊さんは靴に足を合わせて履きゆうきにこらえて履き」と言われた。

山北の上空を飛んでいた木の造の練習機「赤トンボ」さえ、むなく戦場へ消えていった。

港では「神風が吹いて日本は勝つ」とか「敵が上陸して来たら水際で全滅する」などと、良く聞かされた。

地域では婦人会が、学校では高学年が、竹槍や模擬銃剣を持って、「敵を突く」訓練に余念がなかった。

学校の南校舎には軍隊が駐屯し、運動場は空き間なく大砲の置場になって、下級生は午前中、上級生は午後からの

時間差登校に変わった。そして防空頭巾を携行し、救急袋を肩に掛けて通学する子ども

父親の出征

父親は、春に三度目の「赤紙」がきて戦場に引つ張られ、日の丸の小旗を持って沿道に並ぶ婦人会や村の人たちに送られ郷里を後にした。

出征の前日、隣所皆総出で盛大な酒宴を催してくれたが、浅草のりは贅沢品で無く、キャベツの葉をゆでて、巻き寿司を作るなど苦労してくれた。出征する兵士は、皆そんな

銃後の状況を背に戦場へ行った。

勤労奉仕

母は農事の傍ら、配給物資の分配を受け取り、勤労奉仕、婦人会の防火訓練でバケツを持って走るなど、毎日がそんな繰り返りであった。

防空壕は、学校の近くの山や、家の庭など至る所に、堅穴式や横穴式の穴を村をあげて掘っていたし、子どもも土運びなど手伝ったものである。また、衣類の繊維に使う桑の木やハドの皮剥ぎ、食糧不足を補うドングリ拾い、金属く



学校でよく見られた風景(吉川尋常小学校) 全校集会で皇居に向かって敬礼する生徒たち

忘れられない記憶



貞岡由子さん(81歳)
香我美町山北
戦時中に学徒動員を経験。終戦後、高知県へ帰り教師として教壇に立つ。現在は、家業である食品雑貨店を営む傍ら、市内の学校で平和学習の語り部として子どもたちに平和の尊さを伝えています。

【学徒動員】
中学生以上の生徒を軍需工場に配置すること。

家族の悲しみ

そして、昭和20年5月25日、敵の軍艦に見事体当たりして戦死したのです。二十一才でした。

出撃の際、残っていた遺髪が送られてきましたが、叔母はそれを胸に抱きしめ「敵の軍艦に突っ込んだ時はどんなにか恐ろしかったろう。痛かったろう」と、毎夜泣き明かしたのでございます。また、あるときは、たまたまなくなったのか私の母に「姉ちゃんはいわ、由子が女の子じゃったきに戦争に取られざったけんど、秀は男の子じゃったき取られて死んでしまった」とわめき込んでました。どうしようもない悲しみを血のつながった私の母に打ちつけてきたのです。

母は、歯をぐつとかみしめ仁王立ちになったまま一言も発しませんでした。

平和な世になっても、戦死した人の家族や親戚の心に戦後はありません。戦争とは、何と惨たらしいことでしょうか。

皆さん、鹿児島に行く機会があればぜひ、鹿児島県の「知覧特攻平和会館」に立ち寄り、特攻隊で出撃した人たちの遺書、遺品をご覧になってください。

この平和な世に生まれた皆さんが、どんなに幸せか、しみじみ分かります。

学徒動員

昭和20年1月15日、私たちは高知師範学校女子部総勢132人は、愛知県半田市にある中島飛行機半田製作所に学徒動員されました。

秀ちゃんの手紙

「いよいよ出撃の日が迫って参りました。僕は、敵の軍艦に体当たりして、お国のために散華します。お国のために華と散るのは、日本男児と生まれて本懐です。しかし、ただ一つ心に掛かるのは、母上と妹の先々の事を思うと後ろ髪を引かれる思いです。どうか、母上、妹をよろしくお願ひします。また、僕が戦死したら妹は兄がなくなりませう。どうか妹とは、本当の姉妹のように仲良くしてやってください。



高知師範学校女子部の集合写真。この後、半田市へ学徒動員される

5月に入ってから、特攻隊員の従弟の秀ちゃんより出撃するからという手紙が、私の元に届いたので。

母上の事、妹の事、くれぐれもよろしく頼みます」という遺書とも言うべき手紙でした。私はすぐ返事を書きました。

「…略、お母さんの事も、妹さんの事も必ず私が引き受けます。どうか後の事は心配なく

私の内心は、「死なないで！」と、叫んでいるのに、「立派な死を」と戦死することを讃えた歌です。特攻隊に入った以上、どうしても敵の軍艦に突入して死ななくてはなりません。だから、出撃に対し、少しでも秀ちゃんの気持ちに安らかになるようにするために、どうしようしたらよいか、苦渋の手紙と短歌です。

18才の乙女の私が考えた精一杯の「死出の旅路」のはなむけの言葉でした。



故・國吉秀俊さん(享年21歳)
香我美町山北

第58振武隊に所属し、沖縄戦に宮崎県都城東から特攻隊員として出撃。

人類史上類のない特攻という作戦で、爆弾搭載の飛行機もろとも肉弾となり、一機一艦の突撃を敢行しました。沖縄戦では、特攻機が都城東・西基地を中心に突撃し、118機が未帰還となっています。